

物集女城成立の背景

國下 多美樹

はじめに

京都の近郊、乙訓地域は「乙訓惣国」と呼ばれる在地の国人衆が築いた中世城館が多数知られている。平地の城館のみで山城を持たない地域として早くから注目されてきた。しかし、この半世紀以降、宅地開発によって土塁や堀などその痕跡の多くは地表から失われ、後世にいかん保存していくのが大きな課題となっていた。この状況下で関係者の努力によって、2024年10月、向日市物集女町中条一帯に所在する、物集女城跡中心部が史跡指定された。物集女城の当初から調査に関わった一人として誠に感慨深いものであった¹⁾。史跡指定を導いた調査研究の成果は総合報告書²⁾（以下、「総合報告」と表記）としてまとめられており、その歴史的意義は疑うべくもないが、改めて城跡周辺の調査に関わった経験に基づいて、これまでの考古学的成果を再整理し物集女城跡の構造を考え、さらに成立の背景について論じたいと思う。

1 城館研究の課題と分析の視点・方法

中世の城館研究は、縄張り研究に地域史と在地構造の分析を加える村田修三氏の研究³⁾を契機として進められてきた。特に、物集女城のような方形館に堀と土塁を巡らす城館については文献史学と考古学からの研究蓄積がある。本稿で扱う城館の成立をめぐることは、東国における土塁と堀を有する方形館の成立が15世紀以降とされ⁴⁾、西日本での実態が不明であった研究段階を経て、土塁の有無を除けば畿内では12～13世紀頃には成立していることが明らかになった。当地域においても、長岡京市下海印寺遺跡で11世紀末の堀と柵で区画した方形館が確認されている⁵⁾。ただし、方形館の成立は地域的な発展段階、あるいは造営主体を踏まえた成立時期の分析が不可欠であるから当地で堀を構えた方形館が普遍的に存在したとも言えない。また方形館の形態も各種の形態をとることが知られている。ここで注目したい研究に村落と城館という関係での分析がある⁶⁾。中井均氏は、方形館と村落の位置関係に注目して、①居館主導型、②居館縁辺型、③居館分離型、④村落独立型の4類に分けて多様な城館の実態を把握している。

乙訓地域の中世城館においては、規模は類似するものの村落形態や社会的、自然的諸条件は実に多様なあり方を示している。城館研究は、堀で囲まれた防御的範囲のみを対象とするのではなく、村落と城館を空間的に機能分析してより具体的な構造を考えることが重要であろう。ただ、城館の場合、堀と土塁を構えた一角のみを対象として調査が進められることが多い。全国に数多くあるであろう城館跡は大抵の場合、近世以降、村落として現代に引き継がれているから、城館を村落全体との関係で検討することを難しくしている側面がある。その点、物集女城跡は、城館を含む複合遺跡としての中海道遺跡が周知され調査研究が蓄積された。そこで、本稿では、分析対象を向日市物集女町に所在する、弥生時代から近世初頭に至る中海道遺跡として認識される物集女集落（村）と

城館としての物集女城の関係、要するに集落のどの位置に城館があり、当地における開発史の中でどのように整理できるのかを検討することを課題とする。分析資料は、主に考古資料を用いて適宜、文献史料や地図資料も参考にすることにしたい。

2 物集女村と物集女城の成果

2.1. 中海道遺跡と物集女城跡の調査史概観

中海道遺跡は、1970年に物集女町の丘陵下の竹藪が開発によって開かれた際、地元の小学生が須恵器を採集したことが遺跡発見の契機となった。当時、地元の小学校教諭が郷土学習として子供達と広範囲の遺物収集を行った結果、南北250m、東西200mに広域に分布していることが明らかになった⁷⁾。その翌年、第1次発掘調査が行われ中海道遺跡として周知された。遺跡範囲は東西630m、南北540mに及ぶ複合遺跡で2022年度までに79回の調査が行われてきた。今回、過去の調査すべての成果を集め直し、弥生・古墳時代、中世、近世の3時代に区分し整理してみた。紙数の関係で掲載できないが、土地利用の評価に関わる一定の傾向を読み取ることができた。

本論の主題となる物集女城跡は、この中海道遺跡のほぼ中央に推定されている。現状は、堀と土塁に囲まれた範囲であり、その西側を城館遺跡の範囲として城館の調査次数を重ねており、その成果は「総括報告」に整理されている。

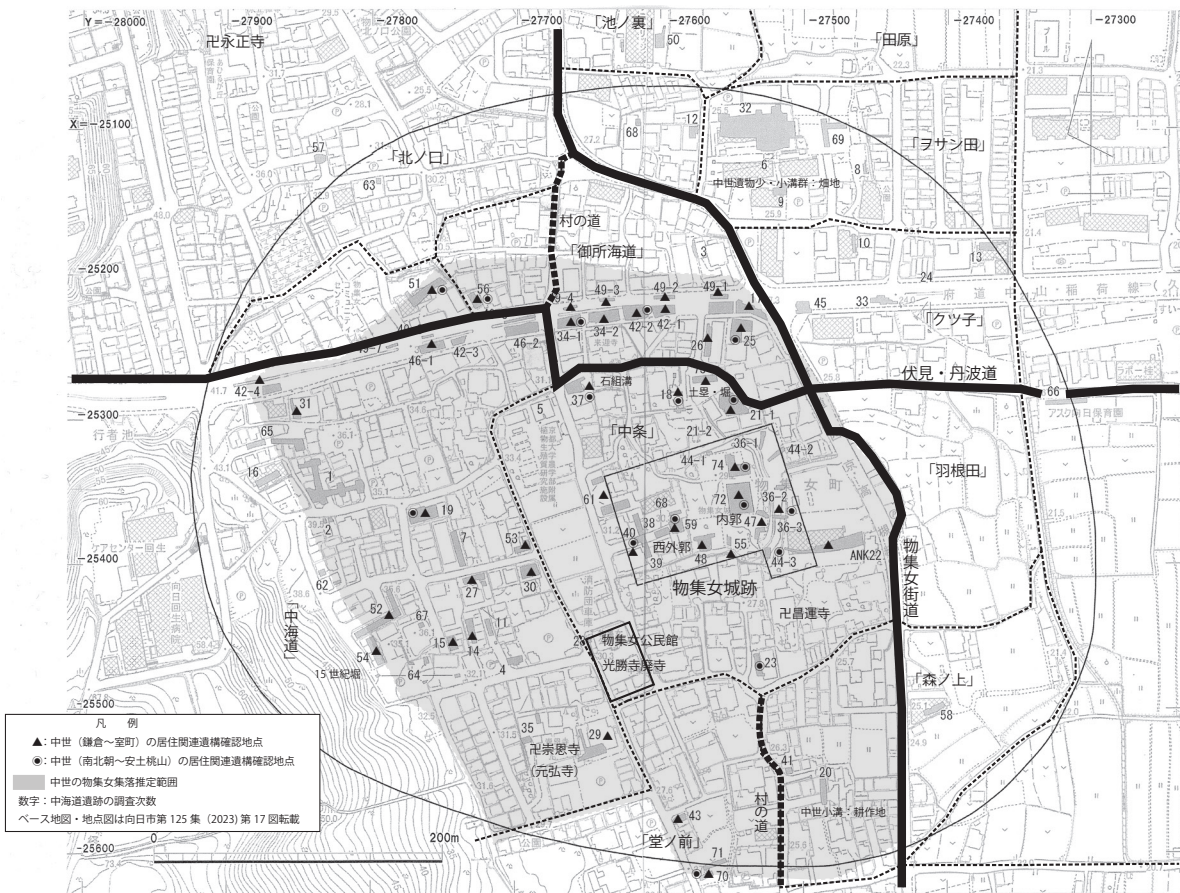


図1 中世物集女集落全体図・中海道遺跡調査地点図

一方で、物集女城跡の存在が考古学的に明確になったのは1983年である⁸⁾。1995年には物集女城跡の初めての発掘（東堀跡）が行われ箱堀であることが明らかになった⁹⁾。以降、計11回の発掘調査が進められてきた。物集女城跡は城跡独自の調査回数と中海道遺跡の調査回数が付されている。本論では、二つの遺跡を重ねて文章が煩瑣とならないように、中海道遺跡の調査回数を付して成果の整理を行うことにしたい。

2.2. 物集女城跡の成果と課題

城館の形と年代 「総括報告」で明らかにされたことは、まず物集女城跡が単郭ではなく複郭構造でそれぞれの空間に機能があったと考えられる点である。城館の中心部は小字「中条」^{なかじょう}に所在し、土塁と堀で囲まれた東寄りの「内郭」とともに「西外郭」にも広がる複郭構造と推定されている。これは、「内郭」内部における2016年と2018年の調査で小規模な柱穴ばかりで居住を示す恒常的な建物が確認されなかったことによる（第72・74次）。西土塁と堀が不明瞭で区画溝のみであった可能性も指摘されている。「西外郭」は「内郭」と比べ地形的に高く、柵で囲まれ、区画溝も存在、根石を持つ建物（第38～40次）があり常住的な居住空間であったと推定される。二つの郭はかつて推測された主と副の関係ではなく、機能の違いであると認識された¹⁰⁾。

土塁と堀が造られたのは15世紀後半と確定している。そして廃絶（解体）は16世紀半ば頃とみられている。これは土塁基底部から15世紀後半の土師器皿が出土（第47次）したことを根拠にする。さらに、「応仁の乱の中で、河内・紀伊から上洛した西軍方の軍勢を東軍方の西岡衆らが迎え撃ち、「物集女縄手」で合戦した」とする文献史料（「野田泰忠軍忠状」応仁元6月17日条）が防御施設構築時の軍事的緊張を教えてくれる。

土塁は堀の掘削土を掻き上げて積み土する構築法であったから、堀も同じ頃つくられたとみてよい（第36・44次）。土塁の解体は出土遺物が急激に減少した16世紀半ばのことと見られている。物集女城の破却記事¹¹⁾を踏まえて歴史的展開をみると、城館としての構えは100年間ほどあったであろう。

城館中心部の規模 中心部の「内郭」は南北約75m、東西約70mの規模である。堀と土塁で囲まれた乙訓の城館跡中心部の類例では革島城跡は南北71m、東西46m、石見城は南北40m、東西60m、開田城は約80m四方であり、概ね一般的な大きさと言ってよく、物集女城が飛び抜けて大きい訳ではない。

虎口（出入口）は未解明 虎口は、従来、「内郭」南東隅の「南張り出し部」に推定されてきた。東堀南端の調査で一部が発掘（第3次）された。堀底の中世堆積土に人頭大の巨石を含む盛土の堆積が確認されている。その後の調査で、南土塁の際は近現代の溝で壊され、「南張り出し部」の上位層（1.0～1.6m）からは近世、16世紀後半から17世紀の土師器皿が出土している（第55次¹²⁾）。早い段階で南土塁は壊されて造成されてしまった可能性も指摘されるが、ごく一部を調査したに過ぎないので追加の調査が必要である（「総括報告」、p.p.189-194）。特に巨礫が伴う点は注意される。16世紀中頃の遺物が盛土を覆う事実から、礫を伴う土橋の可能性も想起しておかなければならない。土橋とすればもともと土橋の両肩に護岸された礫を想定できよう。暗渠の有無も含めて調査が必要である。また、北西の虎口の有無も課題となる。

「内郭」と「西外郭」など周辺施設との関係 物集女城の城館が複郭であることは疑いないが、

郭を結ぶ道や西方の小字「中海道」との関係、小字「中条」とその周囲との関係など、物集女城の内と外の機能解明が課題となる。また、街道など交通との関係など、「総合報告」の各報告で指摘された通り、調査・研究によって解明すべき課題はまだ多い。

3 物集女村と物集女城の空間区分と景観

城館を東西で輪切りしてみる(図2) 物集女城は西側の扇状地から低位段丘面にかけて造られた城館である。斜面地の上位から東に向けた各所で実施された発掘調査の断面図を基本図として東西向きの輪切り断面を作成してみた。延長約 250 m を東西で輪切りする。縮尺は東西 1/200、垂直 1/50 で垂直を 4 倍に強調し、発掘調査で確認された中世の遺構面・遺物包含層を太線で示す。

城館当時の地面は、「内郭」東側(城の外)で標高 27 m である。「内郭」西側では 29.5 m と相当の高低差があることが知られる。特に内郭の東土塁と東方の物集女街道側とは数 m の高低差があり、街道側からは城館は見上げるように存在したことになる。ここに城館をこの場所に構えた意図が見える。「内郭」土塁の北東部上面は幅が広く櫓台が推測されていることも参考になる。仮に「内郭」の北東角と南西角を結んだラインを北東方向に延長すると物集女街道と丹波(伏見)道の交差点を通過する位置になる。土塁と堀を構えた目的が街道を通行する人々への政治的、軍事的モニュメントとしての役割を推測することができる。以上の城館の立地から見ると、天文 11 年(1542)に物集女に新市を立てた¹³⁾と記された場所は、二つの街道が交差する「内郭」の北東あるいは東の街道交差点付近に予測できないだろうか¹⁴⁾。

また、断面図を作成したことで、「西外郭」から「内郭」にかけて、西から東への傾斜地が雛壇状に造成され城館の平坦面が確保されたことが知られる。「内郭」西堀についてはなかった可能性

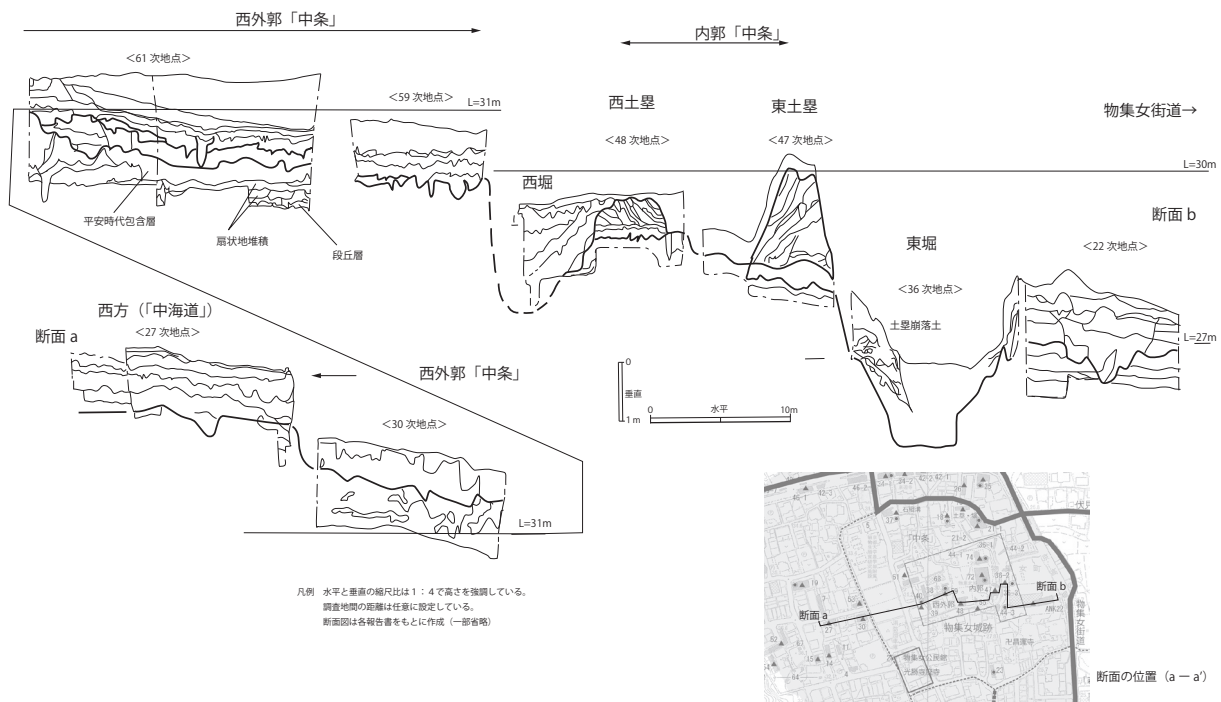


図2 物集女城跡の東西向きの輪切り断面図

も指摘されていたが、むしろ斜面地を切岸して、浅くても堀を造成しなければ「内郭」への土砂流出は防げなかったように推測する。

中央部は堀と土塁、そして柵で囲む空間 確かに、現状では小字「中条」の中央付近が城主の居住空間と見て良い。西側が日常的居住空間で、東側が詰めの空間であったろう。西側は、柵と杭列(61次)、L字の堀(38次)で区画された内部で16世紀を中心とする多数の礎石柱跡(38～40・59～61次)が確認されている。中世遺物は量的にまとまり分布も広い。

居住域を柵で囲むあり方は上述した平安時代後期の下海印寺遺跡の居館¹⁵⁾と親縁的である。物集女城では堀が複数確認されており方形の居住域が複数あった可能性も想定しておかなければならないと考えている。

城館西方の「中海道」は古代以来の居住空間 小字「中海道」^{なつかいどう}は東向きの緩やかな傾斜地で、弥生時代後期(2世紀)から3世紀前半までの竪穴住居が多く確認されている。また飛鳥時代～平安時代の建物、溝、鎌倉時代の建物も多くある。この西端は標高37.5m前後で確認された南北方向の堀があり、以西は居住空間が無いと推測する。要するに、小字「中海道」は、弥生時代以降、伝統的に居住地としての空間を維持されてきたのである。

小字「中海道」の地割りは、時代ごとに変化したことが明らかになっている¹⁶⁾。7世紀末～8世紀は北で西に10度、8世末の長岡京期前後では真南北となる。平安時代(9～10世紀)は北で西に2度～5度に変更され、鎌倉～室町時代に北で西に20度～25度となる。以降、現代まで変更されることはなかった。北で西に傾く斜向地割りは地形の向きに影響されたと考えられるが、「中条」と「中海道」の小字界以西で方格地割りの規則性を強く残す空間である。北限は丹波道、南限は寺戸村との大字界である。その単位は南西部の崇恩寺^{そうおんじ}の区画と以南で約110m四方区画、以北も55m程度の区画を読み取ることができる。現代に残る「中海道」の地割りは鎌倉～室町時代の名残りともみてほぼ疑いない。

城館南方の小字「堂ノ前」は寺院・神社などの宗教空間 ところで、物集女町の南部には、小字「堂ノ前」地名がある。これは平安時代の嵯峨天皇勅願伝承の光勝寺、あるいは中世天龍寺末寺である元弘寺(現崇恩寺)と関係した「お堂の前」が地名となったものであろう。小字「中海道」南部と、「堂ノ前」には、物集女氏の造立とされる夷社も所在し、宗教空間を形成していた。

光勝寺は、物集女城西外郭の南西(物集女公民館付近)にかつてあった廃寺である。50m四方の方形区画が残る。明和8年(1771)長野山見分絵図¹⁷⁾に記載され、永正年中(1504～1487年)に物集筑前守源谷次建立(『寺社御改書』)あるいは嵯峨天皇勅願寺としての建立を伝える。平安時代後期の仏像が伝わる¹⁸⁾。

崇恩寺は、元弘年中(1331～1334年)創建と伝え、寺伝では創建時に元弘寺で天龍寺末寺であった。文明年中(1469～1487年)に再建され崇恩寺と改称された(『寺社御改書付』)。後鳥羽院行宮旧迹也とも説明される。寺域内の調査(第35・37次)では中世～近世の遺物が出土する。大覚寺Ⅱ式系の軒瓦が出土しており創建瓦の可能性が指摘されている¹⁹⁾。西側の藪地から古代遺物も採集されており相当の寺域を有していた。

その他、向日市神社末社で村中支配されていた「夷社」^{えびすじや}が存在。物集女筑前守源谷次が永正年中(1504～1521年)に造立と伝える。

以上、城館中心部に対して南西側は中央権力と結びついた宗教的空間が固めていることが注意さ

れる。

城館北方の小字「御所海道」は幹線交通が交差・平安時代の荘園政所 物集女街道は西国街道から分かれて寺戸村・物集女村・檜原村を結ぶ中世の幹線道路である。村と村を結ぶ「中筋」道^{なかすじ}に対して、村を避けるように段丘縁辺を通過するバイパス道路として機能している。この物集女街道は付け替え説²⁰もあるが、先に述べた道の方位性から大きな変更はなかったとする考え²¹が有力であろう。

一方、丹波（伏見）道は、条里に沿った東西幹道で伏見から丹波方面への幹線道である。低地を西に進んで物集女城の東で段丘に上がる。そして物集女城中心部の小字「中条」の北に沿って西に進み、南北の「村の道」と連結して、食い違い状となり北側を迂回して西に進む。食い違い状に連結する南北の道は「村の道」である。この道は上述したように中世には成立しているの、伏見道（丹波道）との連結部以西は、中世以降に改変された可能性も考えられる。物集女城の北辺部は、小規模な堀と土塁があった可能性が高く、入り組んだ道が錯綜している。食い違い状の道の存在は、堀と土塁を構え始めた15世紀後半の時期に防御性を高めるために、城館中心部の北虎口が設けられていた可能性も想定しておきたい。なお、城館の北西ないし北方では、平安時代中期の遺物がまわって出土する地域がある点も注意して良い。

ところで、1771年（明和8年）の長野山見分図には、物集女町北ノ口西方に永正寺、物集女町長野に御霊社が描かれている。永正寺は、曹洞宗永正寺として現存し、1504年（永正元）に物集女筑前守源谷次が建立したと記される（「寺社御改書付」）。御霊社は向日神社末社として村中支配され、同じ物集女筑前守源谷次建立とされ現存する。

城館北方の二つの街道の交差点一帯は、「御所街道」地名を有する。荘園の政所など公的な施設の存在を暗示させるものである。この「御所街道」以北を物集女村の内部に含めるかはあまりに情報が少ないので難しいが、現状では一部が含まれていた可能性を考えている。

前代から引き継がれた宗教・祭儀施設の伝統 中海道遺跡の北東部では3世紀前半の祭殿跡と推定された大型掘立柱建物が確認されている。中海道集落の北東隅にこのような象徴的な周溝付き高床建物が建設されたことは、当地における有力首長の輩出とこの場所が有する性格を反映したものとみなければならない。弥生時代の集落は後期前半以降、古墳時代前期（庄内式・布留式）の住居が確認され、大集落の存在が見込まれるのである。さらに、古墳時代後期には物集女車塚古墳の造営に引き継がれるなど当地の先進性を読み取ることができる。

また、古代集落内に未知の古代寺院の存在も見込まれる。長岡宮式7171型式軒丸瓦（第1次）と同時期の南都六大寺式鬼瓦（第22次）、平安時代後期（12世紀後葉）の軒瓦（第1次・第17次）など、桓武朝、嵯峨朝、院政期において、断続的にも王権との関係を強めた地域であったと推定できるのである。

4 まとめ

以上、誠に雑駁ながら、物集女城の考古学的な諸成果を改めて整理し、中世城館と物集女村の構造や機能について分析を行った。これをもとに現状で認識できる中世の城と村との関係を模式図として描くと図3のようになる。中世城館の居館と村落の位置関係を類型化した中井均氏分類²²の

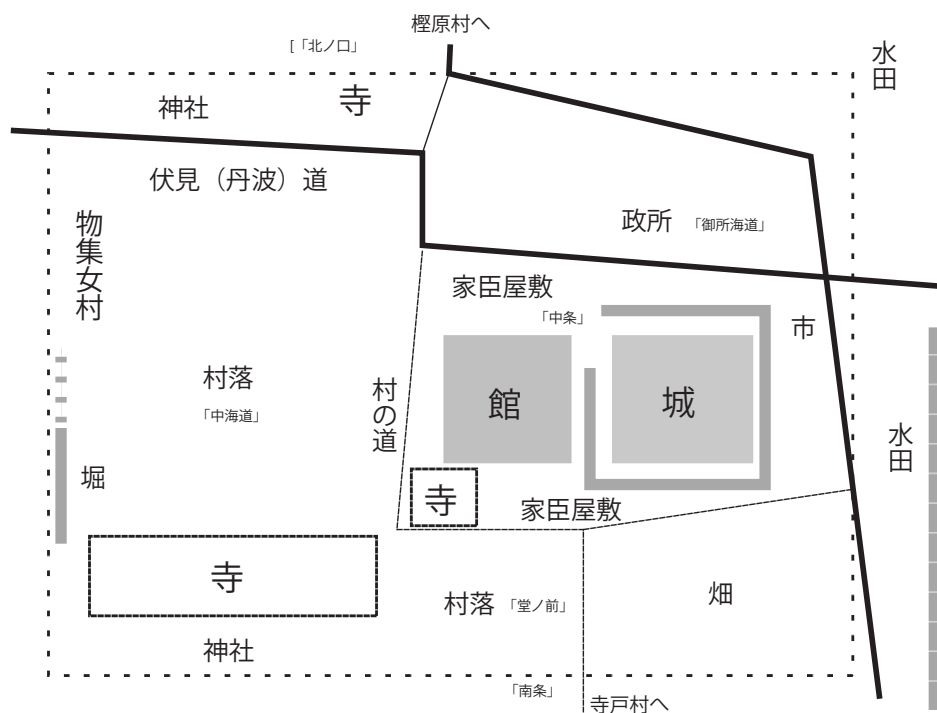


図3 物集女村と物集女城模式図

居館主導型村落に含まれることになろう。特に強調したい点は、この城館が古代以来、断続的に政治的関係を中央政権と持ち続け、一般的な城館とは異なる独自の歴史的展開を有していたことである。物集女地域は、古墳時代前期、後期、平安時代前期・中期、鎌倉時代～戦国時代というそれぞれの時代で地域内では断続的に政治的に優位な立場を保持し続けた。物集女の有力者が伝統的・世襲的に政治的優位者であり続けることができたのは、山城と山陰を結ぶ交通圏を把握したことが大きな要因であろう。この伝統を背景に、古代末期から中世にかけての物集女荘は、物集女村から沓掛村、さらには大枝まで広がる広域を物集女氏が荘園として管理する権利を付与されたのであろう。しかし、この長い政治的伝統も信長入洛を契機として終焉を迎えることとなった。16世紀後半、中世の城館も村も大きな歴史的転換をむかえることになったのである。

最後に、木立雅朗先生との研究交流に感謝すると共に、今後のご活躍を祈念して搁筆する。本稿は、「考古資料からみた物集女城とその周辺の景観」土壘サミット in 物集女、2003年4月19日、「物集女城とその周辺～「都市的な場」の成立過程」城郭談話会、2004年6月26日の内容にその後の成果を加え検討したものである。データの整理、図の作成では原田しいなさん（龍谷大学4回生）の助力を得た。記して感謝申し上げます。

注

- 1) 物集女城跡（京都府向日市）「桂川右岸に位置する乙訓郡、葛野郡一帯の西岡と呼ばれた地域に勢力のあった、「乙訓国」の一人として活躍した物集女氏の城跡、東西約70m、南北約75mの方形の居館で、堀や土壘が残る。京都近郊に残る中世城館は現存するものは数少なく、畿内近国の中世の政治状況を知る上で重要。」（文化審議会令和6年6月24日答申，文化庁HP，https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/pdf/94070501_01.pdf 閲覧）

- 2) 向日市教育委員会・向日市埋蔵文化財センター編『物集女城跡総合調査報告書』(向日市埋蔵文化財調査報告書第125集、2023年)。
- 3) 村田修三「城跡調査と戦国史研究」『日本史研究』211号、日本史研究会、1980年。
- 4) 橋口定志「方形館はいかに成立するか」『争点日本の歴史4 中世編』新人物往来社、1991年、p.p.114-132。
- 5) 京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告集』第150冊、p.p.67-152
- 6) 中井均「居館と村落—近江を中心とした分類の試み—」『琵琶湖州水域における中世村落確立過程の研究』滋賀県立琵琶湖博物館、2004年。後に、中井均「中世の居館・寺そして村落—西国を中心として—」と題して『中世城館の実像』p.p.51-82に再録。
- 7) 2006年10月、当時の教諭である金村允人氏より『物集女のあゆみⅡ』(1970年刊行)を提供いただいた。
- 8) 物集女城の全体図は、1983年まで向日市史編纂事業として文化財担当の渡辺博氏を中心に進められた物集女城跡一帯の平板測量によって作成された。『向日市史 上巻』p851 図139掲載のもので、本格的な調査の第一歩となった。
- 9) 國下多美樹・中塚良・辻本裕也「物集女城跡第2・3次」『向日市報告60集』2003年、p.p.183-217。
- 10) 中井均「物集女城跡の歴史的意義」前掲註2文献、p.p.109-124。
- 11) 元亀元年(1569)7月21日、曾我助乗宛細川藤孝書状(『松井家文書所蔵文書』)には、足利義昭から「物集女城可破之由、度々被仰出候へ共」とされたが実現していないことを記して、物集女氏への圧力がさらに高まった様子を知ることができる。その6年後の天正3年(1575)10月、藤孝と松井康之に当時の当主である物集女宗入を謀殺されることになる。
- 12) 山口均「物集女城第4次」『向日市報告46集』p.p.175-188。
- 13) 物集女に新市を立て塩化物を商売する者があり、西座商人が幕府に訴えた記事である。『室町幕府引付史料集成 上』天文11年(1542)閏3月22日条。
- 14) 山村亜希氏は、物集女新市の候補地として、従来の交差点を候補地として認めながらも城館と接しすぎていることから、城館北西の丹波道を想定している。山村亜希「水利・街道・村落景観からみた物集女城」前掲註2文献、p.p.139-151
- 15) 岡崎研一ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成21～23年度発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告書』第150冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2012年。
- 16) 物集女の地割を検討し始めたのは、1995年の中海道遺跡第29次地点の成果からであった。同調査では、小宇「中海道」内で弥生時代、奈良時代、平安時代、中世の遺構が確認され、建物関連の遺構の方位が変化していくことを明らかにできた。詳細は、次の文献を参照されたい。
國下多美樹「中海道遺跡第29次」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第43集、p.p.233-254。
國下多美樹「物集女城とその周辺～考古学からみた村と城～」『京都 乙訓・西岡の戦国時代と物集女城』(中井均・仁木宏編)、文理閣、p.p.60-76。
- 17) 向日市文化資料館『京都府向日市物集女地区文書調査報告書』1998年。
- 18) 玉城玲子「文献史料による物集女氏の活動」『物集女見学会資料』土塁サミット in 物集女実行委員会 2003年。
- 19) 梅本康広「歴史的環境」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第113集、p.p.10-18、2019年(前掲註2文献、に再録)。
- 20) 中川和哉「中海道遺跡の再検討(4)」『京都府埋蔵文化財情報』第50号 p.p.9-14。
- 21) 山口均「物集女街道の成り立ちについて」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第60集 2003年
- 22) 註6中井論文と同じ。

(龍谷大学文学部教授)

表 中海道遺跡（物集女城跡）調査一覧（中央部のみ）

地域区分	調査回数	調査年月	小字名	立地	飛鳥以前		古代		中世		近世		文献	備考	
					遺構	遺物	遺構	遺物	遺構	遺物	遺構	遺物			
中海道遺跡中央部	5	83年～	中条	標高32.2m 扇状地	縄文時代包含層	縄文時代中・後期 縄文土器	平安時代包含層	平安時代：須恵器、灰軸陶器、土師器	中世（15世紀）：土器だまり	中世（15世紀）：土師器、（13世紀）：瓦器			京大6年報 S57年度	京大農場内の調査	
	18	891204～ 891221	中条	標高29.2m 扇状地	古墳時代中期 竪穴住居2棟 古墳時代：溝2条、土壇1基	弥生時代後期：石包丁未製品、弥生土器（高坏、鉢） 古墳時代前期：古式土師器、壺 古墳時代中期：土師器、須恵器	奈良時代後期～平安時代：平瓦 平安時代：黒色土器	中世（13世紀中心）：溝2条、丸瓦 中世（13～15世紀）：溝1条	中世（13世紀中心）：瓦器、国産陶器（丹波・東播） 輸入白磁瓦類（1050年前後）、天目、鉄釘	近世：溝5条、土壇2基	近世：京焼、染付、土師質土器、瓦質土器	向日市60集	中世～近世の遺物多い。物集女城北堀に向かう中世～近世の南北溝あり		
	21	920615～ 920731	中条	標高27～ 30m 段丘・下位面		弥生時代後期：弥生土器（壺・甕） 古墳時代前期：古式土師器、壺（壺・甕・器台）		中世以降（13～14世紀中心）：段状遺構1条、溝8条、土壇3基、井戸1基	中世：瓦器、土師器、木製品（木簡・人形・曲物）、銭貨（北宋）、石鏃、砥石	近世：土壇1基	近世：石仏20体以上、五輪塔、砥石、視、銭貨（寛永通宝）	向日市60集	物集女城北堀北側		
	22	920818～ 921008	中条	標高27～ 28m 段丘・下位	弥生時代末～古墳時代初頭：土壇1基 古墳時代前～中期：溝1条	後期弥生土器：壺・甕・高坏、古式土師器、壺・甕・高坏、古墳時代後期：須恵器	長岡京期～平安時代前期：柱穴群 平安時代前期～中期：掘立柱建物1棟（N10'W）、溝1条	平安時代（10世紀）：黒色土器、緑軸陶器、灰軸陶器、土師器 長岡京期：長岡宮式鬼面文瓦	中世：土壇1基、石組み井戸か1基		近世～近代：大溝1条、道路1条、溝2条、小溝群	近世：陶磁器	向日市60集	物集女城東堀東側	
	23	920922～ 921017	中条	標高27.3m 扇状地		弥生時代後期：弥生土器（壺・甕、器台）	平安時代（11世紀後半ないし以降）：土壇2基 弥生時代後期～平安時代：流路	長岡京期～平安時代：土師器、須恵器、黒色土器、緑軸陶器、灰軸陶器、花崗石			近世以降：土壇1基、暗渠溝4条、石組遺構1基		向日市60集	物集女城南側。土壇SK2306は11世紀後半の一括資料	
	28	940912	中条	標高30m 扇状地										向日市60集	
	35	951003～ 951018	中条	標高29.9～ 30.7m 扇状地		弥生時代終末～古墳時代初頭：古式土師器			中世（14世紀初）：溝状凹み	中世：土師器、須恵器、瓦器	近世：溝1条、ピット1基	近世～近代：陶磁器、瓦	向日市60集		
	36	951025～ 951204	中条	標高27m 扇状地 段丘・下位面		古式土師器：壺			物集女城東堀跡	中世：土師器		近世～近代：陶磁器・木製品	向日市60集	物集女城第2次	
	37	960401～ 960418	中条	標高30.7m 扇状地	弥生時代終末～古墳時代初頭：土壇1基、土器溜り1基	古墳時代前期：古式土師器 古墳時代後期初頭：韓式系土器		奈良時代：重圓文新瓦 奈良時代末～平安時代初頭：須恵器 平安時代（10～11世紀）：黒色土器、土師器、須恵器、緑軸陶器、瓦	中世（13～14世紀中心）：16～17世紀）：土壇2基、石組溝1条、溝5条、凹み2基、ピット6基、段状遺構（土壇痕跡か）	中世：土師器、瓦器、青磁、土製品、石製品	近代：溝1条、土壇3基、凹み5基、ピット5基	近世以降：銭貨	向日市44集		
	38	960402～ 960531	中条	標高30.2m 扇状地		弥生時代終末～古墳時代初頭：古式土師器		奈良時代：土師器、平瓦 平安時代（10世紀）：黒色土器	中世I期：掘状溝1条、槽6条、ピット、土壇1基 中世II期：溝4条	中世（15世紀～16世紀前）～中世（14世紀）：土師器、須恵器、粘土塊			向日市44集	物集女城西外郭で16世紀の柱穴群	
	40	970108～ 970114	中条	標高30.2m 扇状地	古墳時代前期：竪穴住居	古式土師器：壺・高坏、古墳時代後期：須恵器、環蓋	中世以前：ピット	奈良～平安時代：丸瓦	ピット群	中世（15世紀）：土師器		近世：陶磁器、土師器 近代：白磁、棧瓦、陶器	向日市60集	物集女城西外郭	
	44	961125～ 961227	中条	標高27m 扇状地 段丘・下位面		弥生時代終末～古墳時代前期：古式土師器、古墳時代：韓式土器、須恵器		平安時代：須恵器	物集女城東堀跡・北堀跡	中世：瓦器、土師器、磁気、木製品		近世：土師質土器、陶磁器、棧瓦	向日市60集	物集女城第3次	
	47	971002～ 971107	中条	標高約29m 扇状地		弥生時代後期：弥生土器 古墳時代後期：須恵器、埴輪		平安時代（9世紀後半）：土師器	中世：東土壘、南土壘、集積、土壇1基、溝2条	中世：土壘構成（15世紀後半～17世紀）土師器、国産陶器、整地土（14世紀中心・15世紀後半～17世紀）土師器、土壇（15世紀）国産陶器	近現代：溝1条、南張り出し部構成土位（17世紀前半～17世紀後半）	近世：土師器（16世紀後半～17世紀前半）	向日市46集	物集女城第4次。東土壘の築造は15世紀後半。土壘土壇は、土壘土壇（標高約2.5m、下底7.5m、高さ2.1m、立ち上がり角度40°。東土壘土壇（標高約30m）、東堀底面（標高約25.2m）である。高低差は比高は4.8m。	
	48	980519～ 980617	中条	標高約29m 扇状地		弥生時代後期～古墳時代前期：弥生土器 古墳時代後期初頭：須恵器		平安時代：須恵器、灰軸陶器、緑軸陶器	中世：物集女城西土壘、南土壘、西堀、土壘南西コーナー部	中世：土師器（14世紀）、瓦器、土師器（16世紀）		現代：防空壕	向日市49集	物集女城第5次。南西コーナー部確認の結果、郭南辺南西幅35m、西辺南北45m、東辺47.5mとはほぼ確定。土壘崩落の下限は16世紀代。	
	55	001116～ 001214	中条	標高29.4m 扇状地		弥生時代後期前半：弥生土器 古墳時代前期：古式土師器 古墳時代後期：須恵器		奈良時代後期～平安時代前期：須恵器、土師器	中世：物集女城南土壘（底辺6.5m以上、高さ0.55m）、ピット4基（14～15世紀）	中世（15世紀～16世紀前半）：土師器、国産陶器、すり鉢			向日市52集	物集女城第6次。土壘構成土の遺物最新年代は15世紀後半～16世紀前半	
	59	020226～ 020326	中条	標高30m 扇状地		古墳時代：須恵器	飛鳥時代：須恵器 平安時代（10世紀以降）：土師器、瓦器、銭貨（北宋）		中世：土壇1基、溝6条、流路2条、土壇1基、溝1条、柱穴群	中世：青磁、白磁、土師器	近世後半～近代：石組遺構1基、井戸1基	近世：土師器、施釉陶器	向日市59集	物集女城第7次	
	60	020826～ 020913	中条	標高30.3～ 30.4m 扇状地	弥生時代後期～古墳時代：溝1条	弥生時代後期：弥生土器（甕・高坏） 古墳時代：竪穴石材か、埴輪か		奈良～平安時代：須恵器、軒瓦 平安時代：土師器、黒色土器、磁器、金属製品	中世：整地跡、礎石建物1棟（16世紀前半～中世、方位N10'W）、溝2条、土壇遺構1基、ピット群（小形掘立柱建物か） 近代～中世：ピット群	中世（15～16世紀中心）：土師器、須恵器、国産陶器、瓦器、土師器、鉄製品、石製品		近世：国産陶器、磁器、棧瓦	向日市60集	物集女城第8次	
	61	020918～ 021126	中条	標高32m 扇状地			平安時代（10世紀後半）：土壇1基	奈良～平安時代：須恵器、軒瓦 平安時代：土師器、黒色土器、磁器、金属製品	中世：礎石列、地鏡遺構1基、土壇2基 中世か：溝1条、土壇2基	中世：土師器、瓦器、白磁、施釉陶器、陶器、煙瓦	中世～近世：溝5条、土壇3基、ピット4基	近世後期：施釉陶器、磁器	向日市59・63集	物集女城第9次。溝SA0507・溝SD0501は区画溝	
	72	2016110～ 2017217	中条	28.8m 扇状地		古式土師器、須恵器		須恵器、緑軸陶器	区画施設1条、土坑7基、落ち込み3基、溝5条、ピット92基	土師器、瓦器、白磁、青磁、陶器、瓦質土器、銭貨			向日市108集	物集女城第10次。内郭系中世土師器	
74	20181～ 3	中条	28.8m 扇状地					内郭北東部土壘、ピット				向日市112集	物集女城第11次。内郭北土壘		

Background to the Establishment of Mozume- Castle

by

Tamiki Kunishita

This paper is about a medieval castle built by local lords in the Otokuni region, near Kyoto City. It reorganizes the archaeological findings so far and discusses the structure of Mozume-Castle ruins and the background to its establishment. Castle research does not only focus on the defensive area surrounded by a moat. It is important to analyze the spatial function of the village and the castle and consider a more specific structure.

The Mozume-Castle ruins have a compound structure, with each space having a different function. The “west outer bailey” is topographically higher than the “inner bailey” and was a residential space. The earthworks and moat have been confirmed to have been built in the late 15th century, and it is believed to have been abandoned (demolished) around the mid-16th century. The “inner bailey” of the castle is about 75m north to south and 70m east to west. The castle is located in a location that can be looked up at from the road side, and the intention behind its construction in this location is clear. The area “Nakakaidō” to the west of the castle has traditionally been a residential area since the Yayoi period, and it can be assumed that the land division of the area “Nakakaidō” is a remnant of the Kamakura to Muromachi periods. The area “Dōnomae” on the southwest side was a religious space with temples and shrines. The area “Goshokaidō” to the north was a crossroads for major transportation routes, and is assumed to have been the site of a manor office during the Heian period.

From the above analysis, the structure of the entire Monozume Castle ruins was modeled. It has become clear that it was the castle of a group that continued to hold a politically dominant position intermittently in the region since before the Middle Ages, and that the current village landscape retains the structure of that time well.